

昭和二十八年法律第五十六号

元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律

(目的)

第一条 この法律は、元南西諸島官公署職員等の身分、恩給、共済組合の長期給付等に関して、特別の措置を定めることを目的とする。

(定義)

第二条 この法律において、左の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

一 南西諸島 北緯二十九度以南の南西諸島(琉球諸島及び大東諸島を含む)をいう。

二 元南西諸島官公署職員 昭和二十一年一月二十八日において南西諸島にあつた国又は地方公共団体の機関(元陸軍又は海軍の機関を除く)に所属していた職員をいう。但し、市町村に所属していた職員(市町村立の学校、幼稚園又は図書館に勤務し判任官以上の待遇を受けていた者及び準教育職員であつた者を除く)、気象官署に所属していた職員その他政令で定める職員を除く。

三 琉球諸島政府職員 昭和二十一年一月二十九日以後において南西諸島にあつた琉球政府(これ以後の事務を引き継いだ機関及びこれからその事務を引き継いだ機関で政令で定めるものを含む)に所属していた職員をいう。但し、その就任について選挙によることを必要とする職員、常時勤務することを要しない職員その他政令で定める職員を除く。

四 本邦官公署職員 国又は地方公共団体の機関に所属する職員(日本電信電話株式会社等に関する法律(昭和十九年法律第八十五号)附則第四条第一項の規定による解散前の日本電信電話公社又は政令で定める公団若しくは公庫の役員及び職員を含む)をいう。

(元南西諸島官公署職員の退職)

第三条 元南西諸島官公署職員は、この法律に別段の定めがある場合を除く外、昭和二十一年一月二十八日において退職したものとす。

(恩給に関する法令の適用)

第四条 恩給法の一部を改正する法律(昭和二十一年法律第三十一号)による改正前の恩給法(大正十二年法律第四十八号、第十条の二及び第十条の三において「改正前の恩給法」という)第十九条に規定する公務員又は公務員に準ずべき者として在職していた元南西諸島官公署職員が、引き続き政令で定める琉球諸島民政

府職員となつた場合においては、政令で定めるところにより、その琉球諸島民政府職員を同条に規定する公務員又は公務員に準ずべき者として勤続する者とみなし、その者について恩給に関する法令の規定(納金に関する部分の規定を除く)を適用する。

2 前項の規定により恩給に関する法令の規定を適用して給する恩給の年額の計算の基礎となる俸給の年額は、琉球諸島民政府職員の退職当時(第六条第二項に規定する者にあつては、その退職とみなされた当時)の俸給年額に基づき政令で定める方法により算定して得た額とする。

3 第一項の規定により恩給に関する法令の規定を適用する琉球諸島民政府職員が、引き続き本邦官公署職員となつた場合における恩給に関する法令の規定の適用については必要な事項は、政令で定める。

(共済組合に関する法令の適用)

第四条の二 国家公務員共済組合法(昭和二十三年法律第六十九号。以下「共済組合法」という)の規定中退職給付、障害給付及び遺族給付(以下「長期給付」という)に関する部分(以下「旧組合」という)に基いて組織された共済組合で政令で指定するもの(以下「旧組合」という)の組合員たる職員として在職していた元南西諸島官公署職員が、引き続き琉球諸島民政府職員となつたときは、その者のうち、政令で定める者を除き、昭和二十一年一月二十九日以後旧組合並びに共済組合法及びこれに基く命令が南西諸島に適用されたこととされた場合において、旧組合又は共済組合法の規定中長期給付に関する部分の規定の適用を受ける職員として在職した者となるべきものを、その琉球諸島民政府職員としての在職の間、昭和二十一年一月二十八日においてその者が属していた旧組合及び当該旧組合の権利義務を承継した共済組合法に基いて組織された共済組合(以下「新組合」という)の組合員たる職員として在職した者とみなし、且つ、昭和二十一年一月二十九日以後共済組合法の施行前に旧組合令が南西諸島に適用されたこととした場合において、共済組合法第九十条の規定の適用を受けるべき給付をその者が受けるべきこととなるときは、その受けるべきこととなる給付を同条の規

定の適用を受ける給付とみなして、その者について昭和二十一年一月二十九日以後給付事由の生ずる長期給付から適用する。

2 前項の規定により共済組合法の規定を適用して支給する給付の額の計算の基礎となる俸給の額は、琉球諸島民政府職員の退職当時(第六条の二第二項に規定する者にあつては、その退職したものとみなされた当時)の俸給の額に基づき政令で定める方法により算定して得た額とする。

(退職年金等の額の特例)

第四条の三 前条第一項の規定により共済組合法の規定の適用を受ける琉球諸島民政府職員に係る退職年金、退職一時金又は遺族一時金(旧組合及び新組合の組合員であつた期間並びに前条第一項の規定によりこれらの組合の組合員たる職員として在職した者とみなされる期間が二十年以上の者に対する遺族一時金を除く)の額は、昭和二十九年六月三十日まで給付事由の生じたものを除き、同年七月一日から引き続き琉球諸島民政府職員として在職した期間(以下本条において「改正法施行後の在職期間」という)に、応じ共済組合法の規定により算定した額から、左の各号に掲げる区別に従い算定した額を控除した金額とする。

一 退職年金にあつては、俸給日額の二・七分(改正法施行後の在職期間及び共済組合法第九十五条に規定する控除期間を合算した期間が二十年をこえる部分については、一・八日分)に改正法施行後の在職期間を乗じて得た額

二 退職一時金又は遺族一時金にあつては、俸給日額に、改正法施行後の在職期間を組合員の期間とみなし、その期間に応じ共済組合法別表第一に定める日数を乗じて得た額の百分の四十五

2 前項第一号の額の計算については、年を単位として期間を計算するものとし、一年未満の端数は、切り捨てるものとする。

第五条 削除

(在職年の通算の辞退)

第六条 第四条第一項の規定により恩給に関する法令の規定の適用を受ける琉球諸島民政府職員は、同項の規定による在職年の通算を辞退すべき旨を申し出ることができる。

3 第一項の規定による申出は、内閣総理大臣に對してしなければならない。

(在職期間の通算の辞退)

第六条の二 第四条の二第一項の規定により共済組合法の規定の適用を受ける琉球諸島民政府職員で、同項の規定による退職年金についての最短期間(以下この条において「最短期間」という)に達したものは、同項の規定による在職期間の通算を辞退すべき旨を申し出ることができる。

2 前項の規定による申出をした者は、共済組合法の規定の適用については、当該申出をした日以前六月以内でその者の指定する日(最短期間内に達した日が当該申出をした日以前六月以内にあるときは、その最短期間内に達した日)に退職したものとみなす。

第七条 削除

(引き続き他の職員として勤続するものとみなす場合)

第八条 元南西諸島官公署職員が昭和二十一年一月二十九日から百二十日以内に琉球諸島民政府職員となつた場合においては、第四条から第四条の三までの規定の適用については、引き続き琉球諸島民政府職員として勤続するものとみなす。

2 元南西諸島官公署職員が昭和二十一年一月二十九日から九十日以内に本邦官公署職員となつた場合においては、恩給、官署の職員の共済組合又は退職手当に関する法令の規定の適用については、引き続き本邦官公署職員として勤続するものとみなす。

3 第四条第一項又は第四条の二第一項の規定により恩給に関する法令又は共済組合法の規定の適用を受ける琉球諸島民政府職員が、その退職後(第六条又は第六条の二の規定により退職とみなされる場合を除く)三十日(この法律の施行前に退職した場合にあつては、九十日)以内に本邦官公署職員となつた場合においては、恩給又は官署の職員の共済組合に関する法令の規定の適用については、その退職の日の翌日から引き続き本邦官公署職員として勤続するものとみなす。

第九條 昭和二十年九月二日から引き続き海外にあつて昭和二十一年一月二十八日まで帰国しなかつた元南西諸島官公署職員(以下「未帰還職員」という。)については、第三条の規定は、適用しない。

2 昭和二十八年七月三十一日まで帰国した未帰還職員は、その帰国の日から百二十日以内に琉球諸島民政府職員となつた場合又はその帰国の日から九十日以内に本邦官公署職員となつた場合にあつては、その琉球諸島民政府職員又は本邦官公署職員として有していた身分を失わなかつたものとし、その他の場合にあつては、その帰国の日から三十日を経過した日において退職したものとす。

3 昭和二十八年七月三十一日まで帰国しなかつた未帰還職員は、恩給法の規定の適用を受ける者にあつては、恩給法の一部を改正する法律(昭和二十八年法律第五十五号)附則第三十条の規定により退職したものとみなされる日又は死亡した日において、その他の者にあつては、恩給法の規定の適用を受ける者の例に準じて政令で定める日において退職したものとす。

4 元沖繩県がその俸給その他の給与を支給していた未帰還職員に対しては、本邦官公署職員の例に準じて政令で定めるところにより、俸給その他の給与及び退職手当を支給する。

第十條 元沖繩県の疎開学童の教育を担当するたれ他県の教育関係職員に転じ昭和二十一年一月二十九日から同年十二月三十一日まで間において南西諸島に復帰した元沖繩県の教育関係職員が、その復帰の日から百二十日以内に政令で定める琉球諸島民政府職員となつた場合において、まだ当該他県の教育関係職員の職を退いていないときは、その琉球諸島民政府職員となつた日の前日においてその職を退いたものとみなす、すでにその職を退いているときは、その退職の日の翌日から引き続き琉球諸島民政府職員として勤続するものとみなす。

2 前項の琉球諸島民政府職員については、第四条から第四条の三まで、第六条及び第六条の二に規定する場合の例に準じて政令で定めるところにより、恩給を給する。

(元一般官公署職員)
第十條の二 昭和二十年八月十五日において元陸軍又は海軍の官署以外の官公署に勤務していた

改正前の恩給法第十九条第一項に規定する公務員で、政令で定める期間内に第四条第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員となつたもの(同条、第八条又は前条の規定の適用を受ける者を除く。)については、その琉球諸島民政府職員を改正前の恩給法第十九条第一項に規定する公務員として在職するものとみなす。

2 前項の琉球諸島民政府職員については、第四条及び第六条に規定する場合の例に準じて政令で定めるところにより、恩給(年金たる恩給に限る。)を給する。

第十條の三 第四条第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員として在職していた者については、その琉球諸島民政府職員として在職していた期間(同条、第八条、第十条又は前条の規定により当該公務員として在職していたとみなされた期間を除く。)改正前の恩給法第十九条第一項に規定する公務員として在職していたものとみなす。

2 前条第二項の規定は、前項の規定により公務員として在職していたものとみなされた期間を有する同項の琉球諸島民政府職員について準用する。

第十條の四 旧琉球大学において教育事務に従事した職員で昭和四十一年七月一日前に退職したものであるものは、旧琉球大学において教育事務に従事する職員として在職していた期間、第四条第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員として在職していたものとみなす。

2 第十條の二第二項の規定は、前項の規定により琉球諸島民政府職員として在職していたものとみなされた期間を有する同項の旧琉球大学の職員について準用する。

第十一條 削除
(琉球諸島民政府職員期間を有する者の長期給付の特例)
第十一條の二 琉球諸島民政府職員として在職した者(政令で定める者を除く。)については、その在職した期間(その在職した者が昭和二十一年一月二十九日以前において元南西諸島官公署職員として在職していた者(政令で定める者を除く。)である場合には、その在職していた期間を含む。以下「琉球等在職期間」という。)を共済組合法の組合員たる職員として在職した期間とみなし、かつ、同法の規定中長期給付に関する部分の規定(掛金に関する部分の規定を除く。)を適用するとし、たならば同法に基づく年金たる長期給付を受ける権利を有することとなるときは、政令で定める共済組合が、その者又はその遺族に対し、当該年金たる長期給付を支給する。この場合においては、第四条の二の規定は、適用しない。

2 前項の規定により共済組合法の規定を適用して支給する給付の額の計算の基礎となる俸給の額については、第四条の二第二項の規定の例に準じて、政令で定める。

3 第一項の規定による年金たる長期給付の額は、次の各号に掲げる年金に依り当該各号に掲げる金額とする。
一 退職年金 共済組合法の規定により算定した額から俸給日額の二・七日分(琉球等在職期間が二十年をこえる部分については、一・八日分)に琉球等在職期間を乗じて得た額を控除した金額
二 障害年金 共済組合法の規定により算定した額(琉球等在職期間が十年をこえるものにあつては、俸給日額の二・三五日分(琉球等在職期間が二十年をこえる部分については、一・八日分)に琉球等在職期間を乗じて得た額を控除した金額)
三 遺族年金 第一号の規定により算定した退職年金の額の二分の一に相当する金額
四 第四条の三第二項の規定は、前項各号の金額の計算について準用する。

第十二條 南西諸島の官公署の職員であつた者について、その職員たる身分に基きこの法律の施行前に生じた恩給を受ける権利その他国又は地方公共団体に対する権利で金銭の給付を目的とするものの消滅時効は、他の法令の規定にかかわらず、昭和二十三年三月一日からこの法律の施行の日の前日まで進行しないものとする。

2 前項の規定は、官公署の職員の共済組合に対する権利で金銭の給付を目的とするものの消滅時効について準用する。この場合において、同項の規定中、「この法律の施行前」とあるのは「昭和二十九年七月一日前」と、「この法律の施行の日の前日」とあるのは「昭和二十九年六月三十日」と読み替へるものとする。

第十三條 元沖繩県がその俸給を負担していた職員について、昭和二十一年一月二十八日まで給付事由の生じた俸給その他の政令で定める給付(給与等の負担)
第十四條 琉球諸島民政府職員について第四条又は第十条から第十条の四までの規定により給すべき恩給は、総務大臣が裁定し、国庫が負担する。ただし、昭和二十一年一月二十八日に元南西諸島官公署職員として恩給の給付事由が生じたとした場合において、元沖繩県以外の都道府県の知事がその恩給を裁定し、当該都道府県がこれを負担すべきであつた職員に係るものは、当該都道府県の知事が裁定し、当該都道府県が負担するものとし、その経費(政令で定める日以後に支給すべき恩給に係るものを除く。)は、政令で定めるところにより、国庫が交付するものとする。

第十四條の二 第四条の二第二項の規定により支給すべき共済組合の給付に要する費用は、国庫が負担する。但し、左の各号に掲げる共済組合が支給する給付に要する費用は、当該各号に掲げる団体が負担するものとする。
一 専売共済組合 日本専売公社
二 日本電信電話公社 共済組合
三 日本電信電話公社 共済組合
四 日本電信電話公社

2 第十一条の二第一項の規定により支給すべき共済組合の給付に要する費用は、政令で定めるところにより、国、地方公共団体その他の者が負担する。
第十五條 この法律に特別の定があるものの外、この法律の実施に關し必要な事項は、政令で定める。
附 則
附 則 昭和二十八年八月八日法律第一八二号 抄
1 この法律は、公布の日から施行し、昭和二十八年八月一日以後の退職に因る退職手当について適用する。
附 則 (昭和二十九年六月二四日法律第一九七号) 抄
1 この法律は、昭和二十九年七月一日から施行し、元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の

特別措置に関する法律第十二条、第十四条の二及び同法附則の改正規定を除き、昭和二十一年一月二十八日から適用する。

附則（昭和三十一年六月六日法律第一三三号）抄

第一条 この法律は、昭和三十一年七月一日から施行する。

附則（昭和三十三年三月三十一日法律第二七号）抄

1 この法律は、昭和三十三年四月一日から施行する。

附則（昭和三十四年五月一日法律第一六四号）抄

1 この法律は、公布の日から施行する。

附則（昭和三十五年六月二十八日法律第一一一号）抄

1 この法律は、公布の日から施行する。
7 前項の規定による改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律第五條第一項ただし書の規定中国国家公務員等退職手当法第四條の規定に係る部分は、昭和三十四年十月一日以後の退職に係る退職手当について適用する。

附則（昭和三十七年三月三十一日法律第四四号）抄

第一条 この法律は、昭和三十七年四月一日から施行する。

附則（昭和三十九年七月六日法律第一五一号）抄

第一条 この法律は、昭和三十九年十月一日から施行する。

（元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律の改正に伴う経過措置）

第三条 この法律の施行の際現にこの法律による改正前の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「特別措置法」という。）第四條の規定を適用して計算して得た年額の普通恩給又は扶助料を受けている者については、昭和三十九年十月分以降、その年額をこの法律による改正後の同條の規定を適用して計算して得た年額に改定する。

2 この法律の施行前に給与事由の生じた普通恩給又は扶助料の昭和三十九年九月分までの年額の計算については、この法律による改正後の特別措置法第四條の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第四条 この法律の施行の際現にこの法律による改正前の特別措置法第四條の二の規定を適用して計算して得た額の退職年金、障害年金又は遺族年金を受けている者については、昭和三十九年十月分以降、その額をこの法律による改正後の同條の規定を適用して計算して得た額に改定する。

附則（昭和四十一年三月三十一日法律第三六号）抄

2 この法律の施行前に給与事由の生じた退職給付、障害給付又は遺族給付の昭和三十九年九月分までの額の計算については、この法律による改正後の特別措置法第四條の二の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第五条 この法律による改正後の特別措置法第八條から第十條までの規定は、恩給に関する法令の規定の適用については、この法律の施行前に琉球諸島民政府職員を退職し、又は死亡した元南西諸島官公署職員についても適用する。ただし、これらの規定を適用した場合においても、その在職年が普通恩給についての最短恩給年限に達しない者については、この限りでない。

第六条 前條の規定により恩給を受ける法令の規定による普通恩給又は扶助料に関する法令の場合における当該普通恩給又は扶助料の給与は、昭和三十九年十月から始めるものとする。

第七条 この法律の施行前に琉球諸島民政府職員を退職し、又は死亡した元南西諸島官公署職員で、この法律による改正後の特別措置法第八條又は第九條の規定を適用したならば、同法の規定により共済組合に関する法令の規定による退職年金、障害年金又は遺族年金を支給すべきこととなるものについては、同法の規定により、昭和三十九年十月分以降、その者又はその遺族に退職年金若しくは障害年金又は遺族年金を支給する。

2 前項の場合において、この法律による改正後の特別措置法第八條又は第九條の規定により新たに勤続するものとみなされる期間のうち元南西諸島官公署職員として在職した期間を基礎とした一時金である給付を受けた者に係る退職年金若しくは障害年金又は遺族年金の額は、同法第四條の二及び第四條の三の規定にかかわらず、これらの規定によつて計算した額から、政令で定める金額を減じた額とする。

3 前項の規定は、この法律による特別措置法第八條又は第九條の規定の改正により新たに同法の規定により共済組合に関する法令の規定の適用を受けることとなつた者についての共済組合に関する法令の規定による給付の額の計算について準用する。この場合において、同項中「退職年金若しくは障害年金又は遺族年金」とあるのは、「退職年金、障害年金、退職一時金若しくは障害一時金又は遺族年金若しくは遺族一時金」と読み替へるものとする。

附則（昭和四十二年七月二七日法律第八三号）抄

第一条 この法律は、昭和四十二年十月一日から施行する。

（元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第十条 改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「特別措置法」という。）第十條の二及び第十四條の規定は、この法律の施行前に特別措置法第四條第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員を退職し、又は死亡した者についても適用する。

2 前項の規定により普通恩給又は扶助料を受けることとなる場合における当該普通恩給又は扶助料の給与は、昭和四十二年十月から始めるものとする。

附則（昭和四十四年二月一六日法律第九一号）抄

第一条 この法律は、公布の日から施行する。

（元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第十三條 この法律の施行の日（以下「施行日」という。）の前日において現に普通恩給を受けている者が、施行日において改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「特別措置法」という。）第十條の二第一項の規定により公務員とみなされる琉球諸島民政府職員として在職する場合は、施行日の属する月の翌月からその琉球諸島民政府職員を退職する日の属する月まで、当該普通恩給を停止するものとする。

2 改正後の特別措置法第十條の二第一項の琉球諸島民政府職員に係る普通恩給の年額は、琉球諸島民政府職員として在職期間（同項の規定により恩給法の一部を改正する法律（昭和二十一年法律第三十一号）による改正前の恩給法（以下「法律第三十一号」による改正前の恩給法」という。）第十九條第一項に規定する公務員として在職するもの）とみなされる期間に限る。）中に支給された普通恩給があるときは、その支給された普通恩給の額の十五分の一に相当する額をその年額から控除した額とする。

第十四條 改正後の特別措置法第十條の二第一項の規定は、昭和二十年八月十五日において元陸軍又は海軍の官署以外の官公署に勤務していた法律第三十一号による改正前の恩給法第十九條第一項に規定する公務員で、改正後の特別措置法第十條の二第一項の政令で定める期間内に同法第四條第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員となつたもの（同法同條、第八條又は第十條の規定の適用を受ける者を除く。）が、昭和四十四年九月三十日以前にその琉球諸島民政府

附則（昭和四十四年二月一六日法律第九一号）抄

第一条 この法律は、公布の日から施行する。

（元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律の一部改正に伴う経過措置）

第十三條 この法律の施行の日（以下「施行日」という。）の前日において現に普通恩給を受けている者が、施行日において改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「特別措置法」という。）第十條の二第一項の規定により公務員とみなされる琉球諸島民政府職員として在職する場合は、施行日の属する月の翌月からその琉球諸島民政府職員を退職する日の属する月まで、当該普通恩給を停止するものとする。

2 改正後の特別措置法第十條の二第一項の琉球諸島民政府職員に係る普通恩給の年額は、琉球諸島民政府職員として在職期間（同項の規定により恩給法の一部を改正する法律（昭和二十一年法律第三十一号）による改正前の恩給法（以下「法律第三十一号」による改正前の恩給法」という。）第十九條第一項に規定する公務員として在職するもの）とみなされる期間に限る。）中に支給された普通恩給があるときは、その支給された普通恩給の額の十五分の一に相当する額をその年額から控除した額とする。

第十四條 改正後の特別措置法第十條の二第一項の規定は、昭和二十年八月十五日において元陸軍又は海軍の官署以外の官公署に勤務していた法律第三十一号による改正前の恩給法第十九條第一項に規定する公務員で、改正後の特別措置法第十條の二第一項の政令で定める期間内に同法第四條第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員となつたもの（同法同條、第八條又は第十條の規定の適用を受ける者を除く。）が、昭和四十四年九月三十日以前にその琉球諸島民政府

職員を退職（在職中死亡の場合の死亡を含む）した場合においても適用する。

2 前項の規定により改正後の特別措置法第十条の二第一項の規定の適用を受ける琉球諸島政府職員（その者が死亡した場合にあつては、その遺族）で、同条第二項の規定により新たに普通恩給又は扶助料を受けることとなるもの当該普通恩給又は扶助料の給与は、昭和四十四年十月から始めるものとする。

3 第一項の規定により改正後の特別措置法第十条の二第一項の規定の適用を受ける琉球諸島政府職員（その者が死亡した場合にあつては、その遺族）で、昭和四十四年九月三十日において現に普通恩給又は扶助料を受けているものについては、同年十月以降、その年額を、同条第二項及び前条第二項の規定を適用して算出して得た年額に改定する。

第十五条 改正後の特別措置法第十条の二第一項の琉球諸島政府職員又はその遺族については、これらの者が、施行日から起算して六月以内に、内閣総理大臣に対し申出をしたときは、同項の規定にかかわらず、なお従前の例によるものとする。

（改定年額の一部停止）

第十七条 附則第二条、第三条、第十一条、第十二条第二項、第十四条第三項及び第十六条第二項並びに改正後の恩給法等の一部を改正する法律（昭和四十一年法律第二百一十一号）附則第八条の規定により年額を改定された普通恩給（増加恩給又は傷病年金と併給される普通恩給を除く。以下この条において同じ。）又は扶助料（妻又は子に給する扶助料を除く。以下同じ。）を受ける者の昭和四十四年十二月分までの普通恩給又は扶助料については、その者の年齢（扶助料を受ける者が二人あり、かつ、その二人が扶助料を受けているときは、そのうちの年長者の年齢。以下同じ。）が同年九月三十日において六十五歳以上である場合を除き、改定後の年額と改正前の年額との差額の三分の一を停止する。ただし、その者の年齢が、同年十月一日から同年三十一日までの間に六十五歳に達した場合においては同年十一月分及び十二月分、同年十一月一日から同年三月十日までの間に六十五歳に達した場合においては同年十二月分については、この限りでない。

2 附則第十四条第二項又は第十六条第一項の規定により昭和四十四年十月から新たに給される

こととなる普通恩給又は扶助料を受ける者の同年十二月分までの普通恩給又は扶助料については、その者の年齢が同年九月三十日において六十五歳以上である場合を除き、当該新たに給されることとなる普通恩給又は扶助料の年額と当該普通恩給又は扶助料が同年八月三十一日に給与事由が生じていたものとした場合の同年九月におけるその年額との差額の三分の一を停止する。この場合においては、前項ただし書の規定を準用する。

（職権改定）

第十八条 この法律の附則の規定による恩給年額の改定は、附則第三条、第九条、第十二条第二項、第十四条第三項及び第十六条第二項の規定によるものを除き、裁定庁が受給者の請求を待たずに行なう。

附則（昭和四十五年四月二日法律第七号）抄

（施行期日等）
第一条 この法律は、昭和四十五年十月一日から施行する。

附則（昭和四十六年二月三十一日法律第一三〇号）抄

（施行期日）
1 この法律は、琉球諸島及び大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定の効力発生の日から施行する。

附則（昭和四十七年六月二日法律第八〇号）抄

（施行期日等）
第一条 この法律は、昭和四十七年十月一日から施行する。

2 第三条の規定による改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「特別措置法」という。）の規定並びに附則第十四条第二項及び第三条、第十五条、第十六条、第十七条第二項、第十八条第二項、第十九条第一項及び第三項並びに第二十条の規定は、琉球諸島及び大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定の効力発生の日（以下「沖繩復帰の日」という。）から適用する。（特別措置法の一部改正に伴う経過措置）

第十三条 改正前の特別措置法第四条、第十条又は第十条の二に規定する者に給するこれらの規定に基づく普通恩給又は扶助料については、沖繩復帰の日の属する月分以降、その年額を、改

正後の恩給法及び特別措置法の規定を適用したとした場合における恩給の年額の計算の基礎となるべき仮定俸給年額を退職又は死亡当時の俸給年額とみなし、これらの法律の規定によつて算出して得た年額（その年額が、法律第八十一号附則第二条第一項の規定によりその退職又は死亡当時の俸給年額とみなされた同法附則別表第二の仮定俸給年額の三段階上位の仮定俸給年額を退職又は死亡当時の俸給年額とみなし、これらの法律の規定によつて算出して得た年額より少ないときは、当該年額）に改定する。

第十四条 改正後の特別措置法第四条又は第十条の三の規定の適用により新たに普通恩給又は扶助料を受ける権利を取得することとなる琉球諸島政府職員又はその遺族の当該普通恩給又は扶助料の給与は、沖繩復帰の日の属する月から始めるものとする。

2 改正後の特別措置法第四条又は第十条の三の規定の適用により新たに給されることとなる普通恩給又は扶助料で、公務員として在職したことのある琉球諸島政府職員の退職又は死亡に基づくもの恩給の年額の計算の基礎となる俸給の年額は、これらの規定に基づく恩給の年額の計算の基礎となる俸給の年額が、当該退職又は死亡の時から沖繩復帰の日の前日まで改正前の特別措置法の規定によりその普通恩給又は扶助料を給していたとした場合に前条の規定により沖繩復帰の日において給することとなる恩給の年額の計算の基礎となるべき俸給の年額より少ないときは、その年額とする。

3 第一項の規定により新たに普通恩給又は扶助料を給されることとなる者が、同一の在職年に基づき改正前の特別措置法第四条第一項の規定により一時恩給又は一時扶助料を受けた者である場合における普通恩給又は扶助料の年額は、当該一時恩給又は一時扶助料の金額の十五分の一に相当する金額をその年額から控除した額とする。ただし、当該一時恩給又は一時扶助料が国庫に返還された場合は、この限りでない。

第十五条 改正後の特別措置法第十条の三第一項に規定する在職期間を有する琉球諸島政府職員に係る普通恩給の年額は、同項の規定により公務員として在職していたものとみなされた琉球諸島政府職員としての在職期間中に支給された普通恩給があるときは、その支給された普通恩給の額の十五分の一に相当する額をその年額から控除した額とする。

第十六条 改正後の特別措置法第十条の三第一項の琉球諸島政府職員又はその遺族に係る在職年については、これらの者が、この法律の施行の日（以下「施行日」という。）から起算して六月以内に、裁定庁に対して同項の規定による在職年の通算を希望しない旨の申出をしたときは、同項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第十七条 改正後の特別措置法第四条又は第十条の三の規定により普通恩給の基礎となるべき公務員としての在職年の計算において新たに加えられるべき在職年又は勤続在職年についての加給を附せられるべき在職年を有することとなる者に係る普通恩給又は扶助料については、沖繩復帰の日の属する月分以降、その年額を、これらの規定及び附則第十五条の規定によつて算出して得た年額に改定する。

2 附則第十四条第二項の規定は、前項の規定によりその年額が改定されることとなる普通恩給又は扶助料で、公務員として在職したことのある琉球諸島政府職員の退職又は死亡に基づくもの年額の計算の基礎となる俸給の年額の計算について準用する。

第十八条 改正後の特別措置法第六条（同条の例に準ずることとされている場合を含む。）の規定の適用により普通恩給又は扶助料を受けている者は、施行日から起算して六月以内に、裁定庁に対して、琉球諸島政府職員を退職したものとみなされた日後の在職年の通算を希望する旨を申し出ることができる。

2 改正後の特別措置法第六条第二項の規定は、前項の規定による申出をした者については、適用がなかつたものとみなす。

第十九条 前条第一項に規定する申出をした者に係る普通恩給の年額は、琉球諸島政府職員を退職したものとみなされた日後の在職年を加えた在職年数に基づき算出して得た年額から、改正前の特別措置法第四条第一項、第十条第一項又は第十条の二第一項に規定する琉球諸島政府職員としての在職期間中に支給された普通恩給の額の十五分の一に相当する額を控除した額とする。

2 前条第一項に規定する申出をした者については、沖繩復帰の日の属する月分以降、その普通恩給又は扶助料の年額を、前項及び改正後の特別措置法の規定によつて算出して得た年額に改定する。

3 附則第十四条第二項の規定は、前項の規定によりその年額が改定されることとなる普通恩給又は扶助料の年額の計算の基礎となる俸給の年額の計算について準用する。この場合において、同条第二項中「これらの規定」とあるのは、「同法第四条、第十条又は第十条の二」と読み替えるものとする。

第二十條 改正後の特別措置法第四条第一項の政令で定める琉球諸島民政府職員として在職していた期間のうち、次に掲げる期間とは、同法第十条の三第一項の規定にかかわらず、同項に規定する公務員として在職していたものとみなされる期間に算入しない。

一 改正後の特別措置法第四条の二の規定の適用により年金たる給付を受けた者の当該給付の基礎となつた期間

二 元沖縄県吏員恩給規則の規定による恩給受給権者のための恩給支給に関する特別措置法（千九百六十八年立法第七十八号）の規定の適用により年金たる給付を受けた者の当該給付の基礎となつた期間

2 改正後の特別措置法第十条の三及び附則第十三条から前条までの規定は、公務員退職年金法（千九百六十五年立法第百号）、公立学校職員共済組合法（千九百六十八年立法第百四十七号）、公立学校職員共済組合法の長期給付に関する施行法（千九百六十八年立法第百四十八号）、公務員等共済組合法（千九百六十九年立法第百五十四号）又は公務員等共済組合法の長期給付に関する施行法（千九百六十九年立法第百五十五号）に係る年金たる給付を受ける者については、適用しない。

3 前項に規定する者のうち、改正前の特別措置法第四条、第十条又は第十条の二の規定の適用により年金たる恩給を受けていた者に対する恩給に関する法令の適用については、なおこれらの規定の例による。

（職種改定）
第二十二條 この法律の附則の規定による恩給年額の改定は、附則第三条、第十二条、第十三条、第十七条、第十九条及び前条の規定によるものを除き、裁定庁が受給者の請求を待たずに行なう。

附則（昭和四十七年六月二日法律第八一号）抄

（施行期日等）
第一条 この法律は、昭和四十七年十月一日から施行する。

2 第四条の規定による改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「改正後の特別措置法」という。）の規定及び附則第五条から第九条までの規定は、琉球諸島及び大東諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定の効力発生の日（以下「沖縄復帰の日」という。）から適用する。

第五條 第四条の規定による改正前の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（以下「改正前の特別措置法」という。）第四条の二の規定の適用を受ける年金たる長期給付については、沖縄復帰の日の属する月分以後、その額を、改正後の特別措置法の規定及び年金の額の改定に関する法令の規定を適用したとした場合における年金たる長期給付の額の計算の基礎となるべき仮定俸給の額を退職又は死亡当時の俸給の額とみなし、これらの法令の規定により算定した額（その額が、昭和四十二年度以後における国家公務員共済組合等からの年金の額の改定に関する法律第三条の四において準用する第一条の四第二項の規定により年金額の算定の基礎となつている俸給とみなされた同法別表第一の六の仮定俸給の三段階上位の仮定俸給を俸給とみなし、これらの法令の規定により算定した額より少ないときは、当該算定した額）に改定する。

第六條 改正後の特別措置法第十一条の二第一項の規定の適用により新たに年金たる長期給付を受ける権利を有することとなる者には、沖縄復帰の日の属する月分以後、その年金たる長期給付を支給する。

2 改正後の特別措置法第十一条の二第一項の規定の適用により新たに支給されることとなる年金たる長期給付で、政令で定める琉球諸島民政府職員の退職又は死亡に基づくものの額の計算の基礎となる俸給の額は、同条第二項の規定に基づき年金たる長期給付の額の計算の基礎となる俸給の額が、当該退職又は死亡の日から沖縄復帰の日の前日まで改正前の特別措置法の規定によりその年金たる長期給付を支給されていたとした場合の前条の規定により沖縄復帰の日に

3 改正後の特別措置法第十一条の二の規定の適用により、新たに長期給付の基礎となるべき組合員期間に算入されるべき期間を有することとなる者に係る年金たる長期給付については、沖縄復帰の日の属する月分以後、その年金の額を、同条の規定を適用して算定した額に改定する。

4 第二項の規定は、前項の規定によりその年金の額が改定されることとなる年金たる長期給付で、第二項に規定する琉球諸島民政府職員の退職又は死亡に基づくものの額の計算の基礎となる俸給の額の計算について準用する。

5 改正後の特別措置法第十一条の二第一項に規定する琉球諸島民政府職員として在職した者で、同項に規定する共済組合法（以下「共済組合法」という。）に基づく退職年金又は障害年金を受けた同項に規定する琉球等在職期間（以下「琉球等在職期間」という。）を有するものに改正後の特別措置法に基づく退職年金又は障害年金を支給するときは、その受けたこれらの給付の額（次項において「退職年金等受給額」という。）に相当する額に達するまで、支給時に際し、その支給時に係る支給額の二分の一に相当する額を控除する。

6 前項に規定する者が死亡したことにより改正後の特別措置法に基づく遺族年金を支給するときは、退職年金等受給額（同項の規定により既に控除された額があるときは、その額を控除した額）の二分の一に相当する額に達するまで、支給時に際し、その支給時に係る支給額の二分の一に相当する額を控除する。

7 改正後の特別措置法第十一条の二第一項に規定する琉球諸島民政府職員として在職した者又はその遺族については、これらの者が、施行日から起算して六月以内に、同項に規定する政令で定める共済組合（次条第一項において「組合」という。）に対して、同法第十一條の二の規定の適用を受けることを希望しない旨の申出をしたときは、同条の規定は、適用しない。

第七條 改正後の特別措置法第六條の二の規定の適用により年金たる長期給付を受けている者は、施行日から起算して六月以内に、組合に対して、琉球諸島民政府職員を退職したものとみなされた日後の琉球等在職期間の通算を希望する旨を申し出ることができる。

2 改正後の特別措置法第六條の二第二項の規定は、前項の規定による申出をした者については、適用がなかつたものとみなす。

3 第一項の規定による申出をした者については、沖縄復帰の日の属する月分以後、その年金たる長期給付の額を、改正後の特別措置法の規定を適用して算定した年金の額に改定する。

4 前条第五項又は第六項の規定は、第一項の規定による申出をした者で共済組合法に基づく退職年金若しくは障害年金を受けた琉球等在職期間を有するもの又はその遺族に改正後の特別措置法に基づく退職年金若しくは障害年金又は遺族年金を支給する場合について準用する。

5 前条第二項の規定は、第三項の規定によりその額が改定されることとなる年金たる長期給付の額の計算の基礎となる俸給の額の計算について準用する。この場合において、同条第二項中「同条第二項」とあるのは、「同法第四条の二第二項」と読み替えるものとする。

第八條 改正後の特別措置法第四条の二及び第十一条の二並びに前三条の規定は、公務員退職年金法（千九百六十五年立法第百号）又は施行法第五十一条の四第二号に規定する沖縄の共済法に係る年金たる長期給付を受ける権利を有する者については、適用しない。

第九條 附則第五条から前条までに定めるもののほか、改正後の特別措置法の規定（共済組合法の適用に係る部分の規定に限る。）の適用に必要な事項は、政令で定める。

附則（昭和四十九年六月二日法律第九三号）抄

（施行期日）
第一条 この法律は、昭和四十九年九月一日から施行する。

（元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律の一部改正に伴う経過措置）
第十二條 改正後の元南西諸島官公署職員等の身分、恩給等の特別措置に関する法律（昭和二十八年法律第百五十六号）第十条の四の規定により普通恩給の基礎となるべき公務員としての在職年の計算において新たに加えられるべき期間を有することとなる者に係る普通恩給又は扶助料については、昭和四十九年九月分以降、その年額を、同法の規定によつて算出して得た年額に改定する。

附則（昭和四十九年六月二日法律第九〇号）
この法律は、公布の日から施行する。

（施行期日等）
第一条 この法律は、昭和四十七年十月一日から施行する。

附則（昭和五十七年七月一六日法律第六六号）

この法律は、昭和五十七年十月一日から施行する。

附則（昭和五八年一二月二日法律第八〇号）抄

（施行期日）

1 この法律は、総務庁設置法（昭和五十八年法律第七十九号）の施行の日から施行する。

（経過措置）

3 この法律の施行の際、現にこの法律による改正前の恩給法（恩給法の一部を改正する法律（昭和二十六年法律第八十七号）附則その他恩給に関する法令を含む。）、統計法、統計報告調整法、国会議員互助年金法及び行政相談委員法（以下「恩給法等」と総称する。）の規定により国の機関がした裁定、指定、承認その他の処分又は通知その他の行為は、この法律による改正後の恩給法等の相当規定に基づいて相当の国の機関がした裁定、指定、承認その他の処分又は通知その他の行為とみなす。

6 この法律に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定めることができる。

附則（昭和五九年一二月二五日法律第八七号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、昭和六十年四月一日から施行する。

（政令への委任）

第二十八条 附則第二条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な事項は、政令で定める。

附則（昭和六一年一二月四日法律第九三号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、昭和六十二年四月一日から施行する。

（政令への委任）

第四十二条 附則第二条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な事項は、政令で定める。

附則（平成九年六月二〇日法律第九八号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一九年三月三一日法律第一八号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、平成十九年四月一日（以下「施行日」という。）から施行する。

附則（平成二六年四月一八日法律第二二号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において、政令で定める日から施行する。